

「宿泊保育實際」を讀みて

大塚喜一

編輯係りの方から何かの感想を書く様にと望まれましたので、本誌近頃の記事のうち殊に共鳴し啓發さるる事の多かつた事に就て遠慮無く卑見を述べて更に廣く諸賢の御感想御批評を伺ひたいと思ふ。

本誌本年五月號に記された岡山女師附屬幼稚園の「宿泊保育實際」を読んで先づ第一に思はるゝのは、普通の幼教園で平生定められてゐる保育をしながら尙其上に時間及内容に於て新しき數歩を踏み出されたる當事の方々の意氣と熱誠とに敬意を表し感激せざるを得ないのである。これについて思ひ合さるゝのは、キリストの「人もし汝に一里

里行く事を強ひなば、共に二里行け」の御言葉であります。私はこれを三浦修吾氏著「生命の教育」で讀んだのであります。此本は教育者の人生を指導する上によい本と思ひますが、今此處に必要な點だけを抜萃して記して見ますと

基督の出た猶太といふ國は、もと、神の信仰に榮えた美しい國であつたが、基督の頃には大變衰へて、其頃強盛ならし羅馬帝國になつてゐた。其頃のならばしに、羅馬の兵士が公用で荷物を持つて途を行く時には、猶太人に命じて持つて行かせた。猶太の民はいや／＼ながら之を拒むことは出來なかつた。しかし、一里

だけ持つてゆけばよいので、そのあとは放免されて他の猶太人に代るのである。

基督は集れる猶太の民、束縛から免れ救を求むる人々に向つて次の如くに云はれた。
「羅馬の兵士があち身達に荷を負はせて一里の途を強ひた時には、これに共に二里行け！」

決められただけの一里を行くから苦しいのだ。我が心から更に二里の途を行つてやるには、そこに自由が生じ喜が生れて、第一の苦惱が消されてしまふ。』

迎ふる程の意志を以て從事せねばならぬ。「第二里を行く努力」を以てすれば如何なる境遇をも之を自己實現の道場と化する事が出来る。まして我々教育者の生活が此の努力に依て平素以上に如何に新しき生命を創造し得るであらうか。今晩は先生や友達といつしよにおねんねをするのだといふ楽しい豫期を以てつどひ来る幼児等を迎へらるゝ先生方が「何だか平素より以上の慕しさと愛とを感じました」と云はれたのは、正しく此新生活の第一步に輝く神の祝福である。吾人は「第二里を行く家庭」についての三浦氏の次の言葉をひいて宿泊保育の將來を祝福する者である。

『お母さんは、ありふれた主婦のやうに目に見えた事だけを、矢筈しく几帳面に執り行うてゆくのではない。お母さんは、子達の爲、お父さんの爲、隠れた心の奥で、いつも祈つてゐる。輝いた、温い心で祈つてゐる。その、お母さん

の隠れた心の働きは、家人の人々の上に不知をの影響をさつと及ぼすものである。家人の人々は目に見えたところ、耳に聞えるところでよりは見えもせず、聞えもせぬところで、よら多く、お母さんの恩澤を蒙つてゐる。

お母さんのこの心は、お母さんの爲す事よりも偉大なので、お母さんの爲すすべての事の上に、お母さんのこの心は、金粉のやうに撒き散らされるのである。

子供が大きくなつてお母さんに別れた時、お母さんについて思ひ出すことは、お母さんが爲して來た一々の仕事ではない。あの倦む事無くすべての境界を越えて、溢るゝ心で、自分を愛してくれた事である。子供の心に、お母さんの殘す深い印象は、外にあらはれた仕事ではなくして、お母さんの内に溢れてゐた愛なのである。』今、一步を追きて第二義的に考ふるを許さるゝならば、教育者と雖もやはり人間である。一日

中の數時間を幼児達と共に生活して其一人人々の個性を輔導し、而も際立つた被教育意識を起させないやう、自然に具體的に、細かい注意を以て努力と苦心とをして來たのであるから、我家へ歸つた後は足を伸してくつろいで見たいのも人情である。自己の本職以外に別に慰勞や娛樂を求めるは、普通の労働者（體力心力との何れを以つてするも）に多く見る所である。然るに斯かる二元的相對的世界より遙に超脱して、四六時中常に幼兒と共に生活し得る先生は、保育といふ尊い天職そのものゝ中から慰勞と娛樂とを産み出しうるられるので、これこそ眞に幸福なる生活であると思ふのである。斯かる先生に依てこそ宿泊保育の効果は更に深く且廣く及ぼさるゝのであらう。而して、未だ斯かる絶対の境地に到り難き教育者も、自ら進んで「第二里を行く努力」を爲す事に依り、かゝる第一義の境地に参じ得る事かとも思はるゝのである。（昭和四、五、三〇）